

【シンポジウム開催までの経緯】

JASPM会員の中には音楽教育に携わっている方々も多くいますが、彼らはJASPMの年度大会や地区例会に積極的に参加しようとはしません。実は私もそうした一人でした。そんな不熱心な会員である私に、昨年末、「21年度大会を引き受けてくれませんか」と要請がありました。これまで一度も学会の全国大会のまとめ役をしたことがなかったため、少し迷いましたが、私にとって何かの契機になればと思い、引き受けることにしたところ、さらに「大会開催校、つまり大会実行委員長がシンポジウムの企画をするのが通例になっているのですが・・・」と言われました。このときはさすがに迷いました。音楽教育やピアノ教育における既成概念を打ち破り、学生や子どもたちに刺激を与えるという企画ならば‘慣れたもの’。しかし、JASPMはポピュラー音楽の学会なので、京都女子大学児童学科の特色を生かしつつ、どういうあたりに話題を集約していくか……。何度か断ろうかと思いましたが、結局やるはめになってしまいました。シンポジウムの具体的な内容について悩み始めていた10月の初め、私の友人である音楽教育学者が「ボクもJASPMの会員だけど、JASPMに対して音楽を“外側”から研究する学会というイメージを持っていて、だから足が遠のいています・・・」と話しました。そうか、音楽の“内側”の話をすればいいのか……。少し不安が和らぎ、その後、京都で岡田さんと、東京で赤羽さんと打ち合わせてコンセンサスを形成してきました。このシンポジウムでは、ごく一般の(popular)の人々の音楽活動の“内側”の話をしようと思います。

【話題の概要】

深見友紀子は、大学の授業や地域への音楽普及活動(京都女子大学児童学科)、自身のピアノ教室(深見友紀子ミュージック・ラボ)に関する話題を提供する。前者については、保育系学生が行っているポピュラー音楽の演奏や音あそびを例に挙げ、音楽の専門的トレーニングを受けていない者や一般の子どもだからこぞできる日常的な音楽活動のあり様を、主として演奏技能、音素材の側面に焦点をあてて解説する。後者では、子どもたちのポピュラー音楽演奏、レッスンに対する保護者の趣向などに触れながら、ポピュラー音楽の導入に伴って生じる教師の役割や場の変化、さらには「音楽お稽古事」そのものの変容の可能性に言及しようと思う。そして、これらの話題をフロアと共有することで、これまでJASPMが取り上げたことがなかった視点から、ポピュラー音楽の「非専門性」「日常性」「大衆性」を問い直してみたいと考えている。

岡田加津子は、幼少よりヤマハ音楽教室で音楽教育を受け、適度にポピュラー音楽にも触れながら、徐々に西洋音楽の作曲法を学び始めた。近年、五線譜による作曲も数多くこなす一方で、楽器を用いない作品(リズムック・パフォーマンス)も並行して書いている。その契機となったのは、おそらく大学時代にサンバから得た、音楽と身体との密接な関わりであると思われる。現在、音楽系大学の専門教育に携わる一方で、そういった音楽の専門性を持たない保育系の学科において「音楽の何を教えるか」ということが、岡田自身の音楽活動の根底にある問いであるかもしれない。京都女子大学では、「1秒で遊ぶ」「音声を伝える」「音と動きを組み合わせる」などの活動を通し、楽器がなくても音楽すること、身体で音楽を演じること、を主軸において指導にあたっている。このたびのシンポジウムでは、児童学科の一般性と、リズムック・パフォーマンスという表現方法のポピュラー性との接点を見出しながら、活動を紹介する。

赤羽美希は、いわゆる「プロ」の音楽家ではない人を含む多様な人たちと共同で音楽を創作するプロジェクトを企画・実践している。その活動のうちのひとつが「うたの住む家プロジェクト」である。このプロジェクトでは、「民家」という日常に近い空間をホームグラウンドとして、「家」という場所で複数の人が共同で「うた」を作曲するワークショップを継続的に行っている。これまでのワークショップに参加したのは、0歳の赤ちゃんからお年寄り、障害のある人・ない人、学生、近隣商店街の理事長さん、アーティストなど、様々である。そのような人たちと一緒に作り上げてきたうたは、50曲以上にも及ぶ。今回は、このプロジェクトの概要を説明し、この活動の中で実際に生みだされた「うた」の事例をいくつか取り上げ、うたづくりの方法や共同作曲時のエピソードを紹介する。そこから、年齢や職業、立場が異なり、それまで触れてきた音楽も異なるであろう人たちの間で、「共同作曲」「うたう」という行為によってポピュラー化する音楽とその可能性について考えてみたい。

【プロフィール】

深見友紀子

大阪生まれ。東京医科歯科大学歯学部中退。東京藝術大学音楽学部楽理科卒、同大学院修了(音楽教育専攻)。富山大学教育学部助教授を経て、現在、京都女子大学発達教育学部児童学科教授。「深見友紀子ミュージック・ラボ」(東京・早稲田)代表。専門分野は子どもの音楽教育全般、音楽科教育、電子鍵盤楽器、コンピュータ・ネットワークを使用した音楽教育、ピアノ教育。児童学

科音楽隊を監修するほか、児童養護施設でのピアノレッスンボランティアなどを企画している。『デジタル鍵盤楽器で遊ぼう―基本知識と活用例―』（明治図書、1998）、『音楽×コンピュータで大変身』（明治図書、2001）、『この一冊でわかるピアノ実技と楽典―保育士、幼稚園・小学校教諭を目指す人のために―』（音楽之友社、2007）など、著書多数。「教員・保育者養成のためのピアノ実技eラーニングコース」（平成18・19年度科学研究費補助金基盤（C）<http://oberon.nagaokaut.ac.jp/kwu/piano/>）監修など、これまでに5件の科研に研究代表者として取り組んでいる。

深見友紀子オフィシャルサイト <http://www.ongakukyouiku.com/>

岡田加津子

神戸生まれ。東京藝術大学作曲科卒、同大学院修了（音楽教育専攻）。大学院在学中に、九州ギター現代音楽祭作品部門、最優秀賞受賞。「岡田加津子作品展」に対して、2003年バロックザール賞受賞。合唱曲、器楽曲などの委嘱制作もこなしながら、ミニシアター（身体と音楽）、ミニシネマ（映像と音楽）シリーズの制作に力を注ぐ。またそれらの創作活動と並行して、2001年よりリズムミック・パフォーマンスのワークショップを全国各地で行なっている。現在、京都市立芸術大学、同志社女子大学、京都女子大学、神戸松蔭女子学院大学、非常勤講師。近年の主要作品：三部合唱のための「だいじょうぶ」（2009）／独奏ヴァイオリンのための無言歌「母へ」（2009）／「リズムミック・パフォーマンス 2. ～作品集～」(2008)／ミニシアター No.1「ステッキなカサなり」（2003）、No.2「鉄は熱いうちに打て！」（2004）、No.3「Boxing Day」（2005）、No.4「Another Boxing Day」（2006）／ミニシネマ No.1「椿如月」（2006）、No.2「MALTA」（2008）、No.3「飛騨匠奇伝」（2009）、No.4「桜舟」（2009）

岡田加津子オフィシャルサイト <http://www.kazuko-okada.com/>

赤羽美希

長野生まれ。音楽家。奈良女子大学文学部卒、東京藝術大学大学院修了（応用音楽学）。ピアノ鍵盤ハーモニカ、アイリッシュ・ハーブによる演奏活動のほか、鍵盤ハーモニカやピアノのための楽曲・うた・ダンスや演劇のための音楽の作曲にも携わる。また、「ザウルスの音楽ワークショップ」、「うたの住む家プロジェクト（即興からめーる団主催、明治安田生命社会貢献プログラム「エイブルアート・オンステージ」参加事業、港区文化芸術振興基金助成事業）」などの音楽創作プロジェクトの企画・ワークショップファシリテートを行う。港区ふれあいアート事業、取手アートプロジェクト、STスポットアート教育事業部が企画

するアウトリーチ活動のワークショップ講師としても招かれ、保育園、学校、病院など様々な場所でのワークショップも行っている。

赤羽美希ホームページ <http://www.k4.dion.ne.jp/~zaurusu3/index.html>